



「農と食」 北の大地から

連載第79回——中間リポート

「農業と食」をめぐる 対談シリーズを振り返る

2月号から6回にわたり、生協や食品メーカー、酪農の現場で奮闘する人たちの実践を紹介してもらいながら、今後の「農業と食」をめぐる課題や展望を浮き彫りにすべく、対談を重ねてきた。登場してもらった3人に共通したのは、効率を優先させた大量生産・大量消費の道ではなく、北海道の風土や人に根ざした農業や食の取りくみ。企画に至るまでの経緯やエピソードなどを交えつつ、生活クラブ生協・北海道理事長の船橋奈穂美さん、北海道ワイン(株)社長の寫村彰禧さん、中標津町の酪農家・三友盛行さんとの対談を振り返ってみる。

現場で奮闘する生の声を伝えて 「農と食」の明日への希望を探る

生産現場と食卓をつなぐ 生活クラブの活動を紹介

二月号から回を重ねている各界の人たちとの「対談編」の企画は、本誌の工藤年泰編集長と今後の連載の進め方を議論するなかで具体化した。七年間におよぶ長期リポートを続けるわたしは、「評論よりも現場の生

の声を重んじる」を基本姿勢にしてきた。現地報告を中心にすえつつ、インタビュ記事も載せており、北海道食の自給ネットワーク事務局長の大熊久美子さん、副知事から果樹農家に転身した麻田信一さん、農業経済学者の三島徳三さんらに登場願った。ルポのなかに短いインタビューを織り込んだこともある。

この企画は、「対談」の形でそれぞれの実践内容などを紹介してもらい、北海道の「農と食」をめぐる課題や展望を浮き彫りにしよう、という主旨で始めた。一番手は生活クラブ生協理事長の船橋奈穂美さんとの対談(2・3月号)だった。

全国で二番目に多い組合員数を擁し、「大手スーパー」と称されることもある「コープさっぽろ」は近年、「農業賞」を創設(08年4月号で紹介するなど)、この分野でも積極的な活動を進めているが、「対談編」では無店舗型の生活クラブ生協にスポットを当ててみた。これは、同生協の組合員家庭の一員である工藤編集長からのリクエスでもあった。

生活クラブが掲げる理念は、大量生産・大量消費・大量廃棄に代わる「もうひとつの経済活動」を実現していくこと。その理念を具体化させるための活動の中心や課題などを船橋理事長に語ってもらい、ともに北海道の「農と食」のあり方を考えていこう、というわけだ。

古い読者ならご存じかもしれないが、わたしは九〇年代前半の二年間、「農と食の現場で」と題する記事の本誌に連載した。その初回で生活クラブの共同購入を紹介している。

また、長年にわたり追ってきた留萌管内幌延町への放射性廃棄物施設の立地問題では、さまざまな反対運動に取りくむ生活クラブの人たちとの交流を重ねた時期もある。そうした経緯もあり、四代目の理事長を務



生活クラブ生協・北海道
船橋 奈穂美 理事長
(09年2,3月号対談掲載)



北海道ワイン株式会社
寫村 彰禧 社長
(09年4,5月号対談掲載)



中標津の酪農家
三友 盛行 さん
(09年6,7月号対談掲載)

める船橋さんとの対談は、ざっくりぼろんな雰囲気なかで進んでいった。生協の特色を生かす「農業の学校」の構想実現に期待する卵の共同購入がきっかけで一九八二年に設立された生活クラブ生協の歩みを皮切りに、生産者や加工業者とともに開発してきた共同購入品にまつわるエピソード、日本生協連も関わってきた中国製餃子の中毒事件で組合員に混乱が生じたことなどが話題に上った。

物書きのわたしは「口達者ではないし、むしろ聞き上手」になるよう心がけてきた。実のところ対談もあまり得意ではない。そこは、口がうまく、組合員の奥さんの苦勞も目の当たりにしてきた編集長が熱く語ることでフォローしてくれた。しかし、文字化してみると話がかみ合っていない場面も多く、船橋さんに補筆してもらい仕上げていった。

一万四千人弱の組合員を擁する生活クラブ生協は、経営的には安定しているものの、班別の共同購入に取りくむ家庭が減り、設立に携わった人たちから若い人へと世代交代が進むなかで、組織の伸び悩みや役員の



生活クラブ生協は「脱原発」などの
社会運動にも取りくむ

担い手不足などの課題も抱える、という(西城戸誠「抗いの条件」08年・人文書院)には、生活クラブの活動を考察した報告が載っている。

脱原発などの社会運動や、「もうひとつの経済活動」の理念を多くの組合員が共有できていない実態もある。身近な食べものをめぐり、「どうして輸入物はダメなんですか?」と尋ねた若い組合員もいたらしい。生産者との提携に熱心な生活クラブの組合員にしてこの有り様だから、役員たちの苦勞も尽きないのではないだろうか。

対談のなかでわたしは、消費者サイドと生産者が共同出資して小規模な施設を造り、地域の農畜産物の加工分野を広げることや、生協による

“農と食”
北の大地から

現役で奮闘していた。わたしのレポートもずっと読んでくれていたらしい。ありがたいことである。

「ワインづくりは農業」と並ぶ鳥村社長の名言は「肥沃な土に仕える心を取り戻す」ではなからうか。農家ではなく、醸造業に携わる人が口にするところがすこい。

九〇年代半ばのワインブームが去り、苦境に陥った農家を救うために他メーカーから契約を打ち切られたブドウを引き取る。そのために浦臼の農場のブドウを減産する——今回の対談で昨年までの十年間、生産調整を続けてきたことを知った。肥沃な土に仕える心があつてこそその対応といえるだろう。

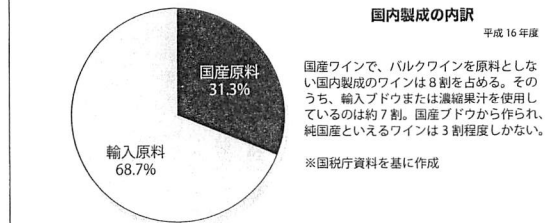
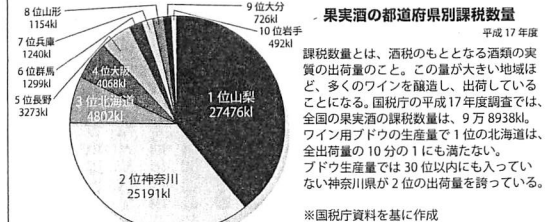
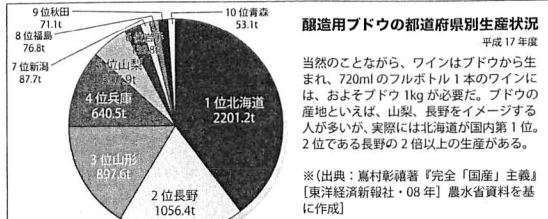
消費者が国産だと思つて飲んで、ワインの多くは、外国から大きな

樽で輸入した「バルクワイン」を国産ワインとブレンドしたり、輸入ブドウ果汁を水で薄めてアルコール醸造したものだという。「純国産」といえるワインは、全体の三割程度しかない。ワイン用ブドウの生産量では三十位以内に入っていない神奈川県が山梨県に次ぐ二位のワイン出荷量を誇る——ワインに関する法律もなく、偽物の「国産ワイン」が横行している。

そんな現状に一石を投じてきたのが純国産にこだわり続ける北海道ワインの実践だった。鳥村社長の本は、同社の歩みを紹介しながら、偽・国産ワインの実態を告発する書にもなっている。

対談では、その点について詳しく説明してもらおうとしたが、どうも口が重い。著書に対する反響が大きく、他メーカーに対する気配りもあるようだ。そこで、編集部がグラフィックを作成してもらい、鳥村社長の話を補足する形で国産ワインをめぐるいびつな構造を分かりやすく伝えようとした。

同社は、道産ブドウを原料にした



体験農場づくりを提案した。船橋さんは、「農業の協同組合的學校を創り、団塊の世代やニートと呼ばれる人たちなど、農業に参加する人を増やすことができるのではないかと」応じた。その後、「農業の學校」の件がどうなったのか聞いていないが、実現に向けて歩みだしてほしい構想である。

「ワインづくりは農業」を実践する鳥村社長に共鳴

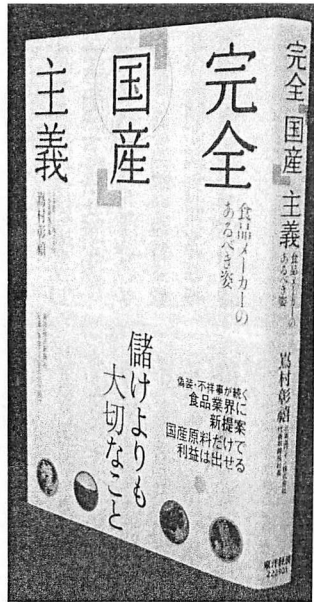
続いての対談相手は、当年八十二

歳になる北海道ワイン(株)の社長・鳥村彰禧さんだった。

食品メーカーの現状に警鐘を鳴らし、改善の道を提言している鳥村社長の著書「完全「国産」主義」(08年・東洋経済新報社)を読んだわたしは、かつて取材でお会いしたころを思い起こした。その変わらぬ情熱にあらためて感謝を受け、「対談編」に登場してもらうことになった。

「農と食シリーズ」の取材では、思いがけない遭遇が何度かあった。高校時代の恩師で、現在は後志管内仁木町で果樹を作り、ヤギを飼う中園穂さん(09年1月号を参照)との出会いもそのひとつ。連載を始めたころ、

「山羊サミット」の会場で三十年ぶりに再会を果たした。それがきっかけで、「鳥村社長は友だちだから、君が取材するのなら仲介するよ」と勧められ、今から六年前に北海道ワインの歩みを紹介(「対談編」に再録)したのだった。



食品メーカーのあり方に警鐘を鳴らした鳥村社長の著書「完全「国産」主義」

のちに廃刊になった「北方農業」(道農業会議発行)の記事で鳥村社長のことは知っていた。会ってみる

と、ワインづくりに懸ける思いを一気に語ってくれ、気骨あふれる人柄が伝わってきた。わたしは本誌のなかで、「鳥村社長は偉ぶるところが全くない、野武士の心を持つ人だった」と印象を記している。

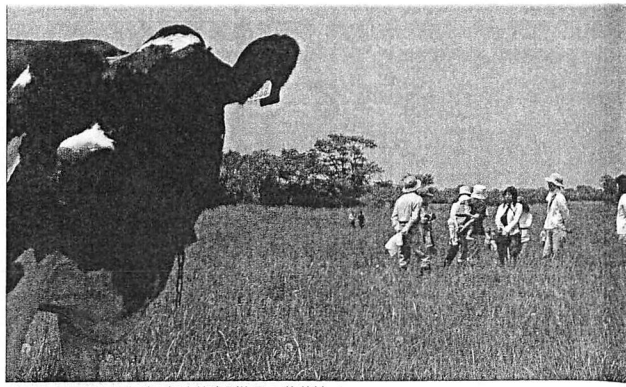
空知管内浦臼町にある同社の直営農場「鶴沼ワイナリー」も訪れ、農場長の今村直さんに広大なブドウ畑を案内してもらった。さまざまな食品メーカーや流通企業などが自社農場を持つ時代になったが、「ワインづくりは農業」を地で行く同ワイナリーの足元におよばない。土づくりを積極的に進めて農業の基本をしつかり押さえ、地域にも貢献している。今村さんのような逸材が鳥村社長の志に共鳴し、農場を支えてきたことが、北海道ワインを発展させてきた原動力といえるだろう。

久しぶりにお会いした鳥村社長は

“農と食”
北の大地から

の持ち主である。現場の声を読者に伝え、「農と食」のあり方を考えてもらうには打って付けの人だと思ひ、今回の対談をお願いした。

チーズ工房を併設した三友牧場は、植樹にも力を入れている。夏の放牧シーズンには草地と牛、木々が織りなす美しい景観を目にすることが出来るが、対談時はまだ舎飼いの季節で、あいにくの雨模様。いい写真を撮れないのが残念だった。



草酪農の可能性が広がる根室管内別海町の牧草地で

「生産を刺激する『緑の政策』や『乳乳価の見直し』を」といった三友さんの名言・提言をいくつも聞いた。自立すること」を基本にすえているから、生き方にきびしいものを持っている。

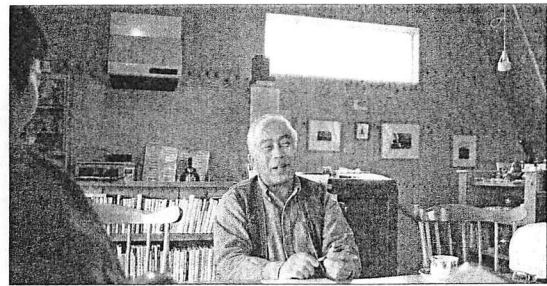
初めて会ったころの三友さん夫婦

無銭旅行で全国各地の農村を見て回り、一九六八年に現在地へ新規入植した話に始まり、「マイペース酪農交流会」の歩み、米国産トウモロコシを中心とした穀物を多給する生産構造の問題点、畜産製品の消費の行方、北海道酪農の可能性、農業支援のあり方、消費者に望むこと……と話題は多岐にわたった。江戸っ子の三友さんの話は歯切れがいいし、論旨も一貫している。あつという間に二時間半あまりが経過した。本誌三号分ほどに相当するボリュームだったが、二号で合計二十二ページになんとか収めて紹介した次第である。

「根室原野では一ヘクタールに一頭の親牛を飼うことが基本」

「『穀物の値段が上がって大変。なんとかしらー』の運動は恥ずかしい」

「穀物を多給した牛の『養殖のミルク』に対し、草飼養のものは『天然のミルク』と言っている」



三友牧場での対談は2時間半におよんだ

（このシリーズでは今後、農業団体や行政、流通などの関係者との対談を計画している。随時、現場レポートを交えながら続けていきたい）

は、真つ当な生産者への道を追求しており、酪農家自身が牛乳・乳製品の加工に取りくむことには否定的だった。「農場産チーズ」の先駆者である共働学舎新得農場の宮嶋望さんが当時、取材に訪れたわたしに、「三友さんの牛乳をチーズにすると最高のものができるとのこと」を残念がっていた。それが今では、チーズ工房を造り、「うちの牛乳に『価値がある』と応えてくれたのは乳酸菌」と受け

止めるようになった。新たな可能性への開眼と酪農家としての成熟があったのだろう。

今回の対談記事を読んだ人からの反響もあった。

よつ葉牛乳の共同購入に取りくみ、三友牧場への訪問経験もある埼玉の女性からは、「一気に読み終わり、久しぶりの感動を覚えた」とのメールが届き、道農政部のある幹部職員は「共感できる内容でした」。マイペース酪農交流会の関係者からもお便りをいただいた。この連載の編集担当者・H氏は「消費者には自立してほしい」の下りを読んで、ハッとしましたよ。たしかにスーパーに依存し過ぎている」と言った。

三友さんの単刀直入な発言を通じて、酪農の現場の声を伝えられたのではないかと、思う。将来的には、生産者と消費者とが同じテーブルで「農と食」のあり方について本音で議論しあい、誌面で紹介するような企画ができないか——そんなことも考えている。



小樽の北海道ワイン本社には「ワインギャラリー」が設置されている

ワインを数多く醸造する一方で、京都と石川に関連会社を設立して国産ワイン普及の一翼を担っている。ひとつの転機を迎えていた石川県の「能登ワイナリー」のことも話題に上ったが、北海道の読者には縁遠く、運営面の微妙な問題も抱えている時期でもあり割愛させてもらった後日、運営問題は良い方向に進んだと聞く。三つの地域で「地域の国産ワイン」を世に送る——それが葛村社長の大きな目標なのである。

「中山間の遊休地にリンゴを植え、

六年前にさかのぼる。

農業関連の公共事業のあり方に疑問を抱いていたわたしは、そのころ釧路開発建設部が進めていた西別川の取水計画を本誌の連載で取り上げた（補助事業を目的外に使ひ、分水嶺を越えて、摩周の水を釧路町まで送って水道水や営農用水にする計画のちに漁協や環境団体の反発で中止に追い込まれた）。余談だが、取材を始めた矢先、別海町内で撮影中に牧柵から落ちて足を骨折するハプニングもあつた（入院二カ月。太りす

そんな出会いであつたが、その後も何度か話を聞く機会があり、狂牛病（BSE）問題が騒がれたころは、拙著『狂牛病を追う』（02年・七つ森書館）に三友さんのインタビューを載せたり、NHKの特集番組と一緒に出演したこともある。最近、標津川の整備計画に関連して、農業・農村公共事業のあり方や湿原再生などについてコメントしてもらつた。



三友牧場には全国から研修生がやってくる

「適正規模の酪農」に魅力を感じた16年前のある出会い

六・七月号の対談相手になつた根室管内中標津町の酪農家・三友盛行さんと初めて会つたのは、今から十六年前にさかのぼる。

「加工にも無限の可能性がある」との提案もあつた。純国産の生ワインを造り続けることに身を捧げてきた人物の話に勇気づけられ、これからの北海道の「農と食」に希望を感じることができた。愚直なまでの生き方を貫いた葛村社長の哲学の一端を読者の皆さんに伝えることができたのではないかと、喜んでる。

「自立」の大切さを強調する酪農現場の生の声を伝えて

農家は毎日の仕事に忙しい。各地に篤農家がついて技術面には明るい、生産から消費に至る流れを俯瞰しつつ討論を展開できる人はそういない。三友さんは、しっかりと経営哲学を持ち、「マイペース酪農の実践や交流の積み重ねがあり、農協組合長として業界の裏舞台も見てきた経験

ぎが事故の主因)。

この取材のなかで同町の獣医師と知り合い、「マイペース酪農」や三友さんの話を聞いた。みずからも酪農に従事した経験があり、規模拡大路線には批判的だったので、「風土に生かされた適正規模の酪農」の話にはすこぶる魅力を感じた。

後日、三友さんに取材依頼の電話をすると、農業以外の媒体には関心を示さず、「言いたいことは自分で発信するよ」（農業に冷淡な消費者は鉄を食べればいんだ）などと、つれない返事。それでも「マイペース酪農交流会」に顔を出したり、農家の実践を聞いたりしてレポートにまとめた。一般誌では初めての紹介だったはずで、三友さんや関係者も好感を持ってくれたようだ。